

文部省特選
文化庁芸術作品賞受賞
教育映画祭
優秀作品賞受賞

優秀映画鑑賞会推薦
日本映画ペンクラブ推薦

伝統工芸の名匠

土と炎と人と ——清水卯一のわざ——



「鉄釉と清水卯一の陶芸」

—長谷部 満彦—

(福島県立美術館長)

清水卯一氏は、「鉄釉陶器」の技術で昭和60年春、「重要無形文化財保持者」の認定を受けた。鉄釉の技術に限れば、青年時代に氏が教えをうけた石黒宗麿について2人目の認定であり、ともに京都を本拠としてこの陶技を攻究し、展開させてきた陶芸家であることも共通している。清水氏は現在では工房を滋賀県の琵琶湖畔に移し、近在に原料を求めて新しい鉄釉陶器制作に没頭している。

日本の高温焼成の施釉陶器は、平安時代に現在の愛知県下にあたる猿投窯で、灰を釉薬に応用する基礎技術が開発され、生産されだした。鉄釉は続く鎌倉時代に、灰釉から派生した一技法として瀬戸窯で開発され、壺、瓶子、仏具類などの施釉技法として採用されたのが始まりである。今日、古瀬戸鉄釉、あるいは古瀬戸褐釉などと呼ばれている黒褐色の施釉陶器がそれで、彫り模様やスタンプ模様など素地装飾を施した上から全面に鉄釉をかけ、焼成した装飾的な陶器であった。現在、鉄釉の技法そのものは、日本の各地に伝承されており、釉技としてはもっとも基本的かつ一般的な技法になっている。

石黒宗麿の鉄釉の性格は、柿釉や天目(黒釉)など、大正期いらい鑑賞陶器流行の発端となつた新来の宋瓷を再現する方向で進められてきたものであつて、日本的な鉄釉とは異なるものであった。清水氏の釉技も、宗麿と同じように基本的には宋瓷に啓発されてはいたが、もちろん単なる形式受容として行なわれたものでないことは、柿釉、青瓷、鐵耀、蓬萊磁それぞれ、全く作者独自の構成のみごとな鉄釉の展開を見てても明らかである。陶器の構成は、陶土、釉、焼成法をすべて総合したトータルなものとして捉えられなければならないが、清水卯一氏の陶芸はこうしたトータルな構成の典型として見ることができるだろう。

近年氏は、過去の豊富な体験に基づく創意にみちた構成を行なうことによって、素材の優れた特性をひきだし。個性的で力強い陶芸表現をさらに展開させている。彼によつて鉄釉は限りなく豊かな表情を、将来もわれわれに示し続けてくれるであろう。



ロクロをまわす表情にも力が入る



登窯を浄め、心をこめて焚く初窯焚き



釉薬をかける



窯を焚き、火色を見ること二昼夜

■解説

山添 哲

土と炎の芸術家、清水卯一の作陶ぶりを紹介しよう。

『どんな陶器づくりをめざしていらっしゃるのですか?』

『私は暖かい感じのやきものを作りたいのです。』

氏の人柄そのもののような答えが返ってきた。

京都五条坂の清水焼の卸問屋に生まれた彼は、はやくから作陶に興味をもち、14才で石黒宗磨に弟子入りした。それはわずかな期間に過ぎなかったが、宗磨の仕事ぶりに接して、作家は土ごしらえから成型、施釉、窯焚きまで全てを自分の手でやらなければ、自分の作りたいやきものは出来ないのだということを覚える。

誰から教わるわけでもない。自ら土を知り、釉薬を知り、炎の働きを知るたゆまざる努力が繰返えされた。

そして、戦後まもなく青年作家として頭角をあらわした頃の、緑釉の壺、渦文大皿、柿釉の鉢など……。どの作品を取り上げても創意工夫をこらした独自の手法で、みずみずしい感覚のおおらかな作品を仕上げている。

人間国宝になつたいま、後継者養成のための研修会でも、『他人のやることを見て、はやく自分のものを作りだすようにしなさい。』と教える。

登窯の小部屋に炎が舞う。1,200度前後を示す温度計。このとき釉薬が融けてやきものが誕生する。キャメラの把えた窯の中は、白熱する炎の色一色。氏の経験ゆたかな鋭い眼差しは、炎の微妙な動きをも見逃さない。

青磁の素地の土を探す。一般に青磁は石でつくるが、それを土でつくって暖かい感じの青磁にしようとしたのも氏独自の発想である。

窯出しのとき、ピーン、ピーンと神秘的な音を響かせながら、魚鱗のような見事な氷裂貫入が生まれるさま——。スタッフも眼をみはる一瞬であった。

びわ湖畔の蓬萊窯では、近くの河原でみつけた一見何の変哲もない黒い石から釉薬をつくり、油滴文とはまた違った銀色に耀く窯変をつくりだすことに成功した。どんな土でもその持味を生かすことによって、様々な肌合いのやきものが生まれる。

清水卯一の鉄釉は、大らかな自然に対する作者の感慨や想念を反映して、限りなく深みのある黒の耀きを増してゆく。

清水卯一・年譜

2 平成 年 10月	63年 5月	63年 1月	62年 4月	61年 11月	60年 4月	54年 4月	52年 4月	48年 9月	45年 1月	38年	37年 6月	35年 9月	15年 3月5日	大正 15年 3月5日
										高松宮總裁賞受賞 出品作品「鉄釉大鉢と小鉢」	第3回プラハ国際陶芸展 （チエコスロバキア）金賞受賞	第7回日本伝統工芸展 （かがや）金賞受賞	石黒宗磨に師事	京都五条坂に生まれる。
										日本伝統工芸展鑑査委員 に推され現在に至る	近江蓬萊山麓に蓬萊窯開窯 第20回日本伝統工芸展 20周年記念特別賞受賞 出品作品「青磁鉢」	日本工芸会常任理事に就任 日本陶磁器協会金賞受賞 文化財技術保持者（人間国 宝）の認定を受ける。 宝の認定を受ける。	日本工芸会副理事長に就任 日本工芸会陶芸会長に 紫綬褒章受賞	清水卯一作陶五十年展開催



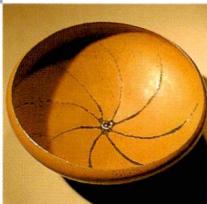
蓬萊燭茶盃



青瓷蓋付飾壺



淡青釉波壺



柿釉鉢



鉄燭扁壺

作 品 名：シリーズ〈伝統工芸の名匠〉
「土と炎と人と」
 ——清水卵一のわざ——
 (35mm/カラー/31分)

企 画：財団法人ポーラ伝統文化振興財団
 製 作：株式会社プロコムジャパン
 監 修：長谷部満彦

製作スタッフ：製	作・神崎晴之
	山崎守邦
脚本・演出・山添 哲	
撮 影・広内捷彦	
照 明・岡本健一	
音 楽・間宮芳生	
録 音・堀内戦治(アオイスタジオ)	
現 像・IMAGICA	
解 説・金内吉男	

協 力：文化庁文化財保護部
 東京国立近代美術館
 京都国立近代美術館

Photo : TUNERO KUWANO, KATSUHIKO HIROUCHI, KAZUHIKO OHORI/Design : WIT

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

財團 法人 ポーラ伝統文化振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階
 TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597

2,000-03.6